

# 反転する世界と「原爆の図」

岡村 幸宣

## ●今日の「原爆の図」

それは幽霊の行列。

一瞬にして着物は燃え落ち、

手や顔や胸はふくれ、

紫色の水ぶくれはやがて破れて、

皮膚はぼろのようにたれさがった。

手をなかばあげてそれは幽霊の行列。

破れた皮を引きながら力つきて人々は倒れ、

重なりあつてうめき、

死んでいったのであります。

(原爆の図第一部《幽霊》より)

関東平野の西のはずれ。埼玉県東松山市の都幾川のもとに、原爆の図丸木美術館がある。

画家の丸木位里、丸木俊が共同制作で描いた「原爆の

図」を常設展示するために、みずから建てた美術館だ。

高さ一・八メートル、横七・二メートルという大画面の「原爆の図」連作には、広島で被爆した人びとの姿が、ほぼ等身大で描かれている。一九四五年八月、広島出身の位里は「新型爆弾投下」の知らせを受け、原爆投下から三日後に家族の身を案じて郷里に駆けつけた。俊も後を追って八月下旬から九月にかけて一カ月ほど救援活動を行った。そのとき体験したことや、まわりの家族たちから聞いた話などを再構成して絵画として表現したのが「原爆の図」である。

生きながらにして焼かれ、幽霊のような姿でさまよわなければならなかった人たち。俊の絵筆はうごめく人間の身体を鋭い線にとらえ、位里の闊達な水墨の流れは画面を縦横につなぎ、奥行き深いものとした。

現在は一五点の連作のうち、第一五部《ながさき》(長崎原爆資料館蔵)をのぞいた一四点が丸木美術館で公開さ